

図書館たより

号数	第71号
発行日	昭和61年1月25日
編集 発行	島根県立図書館
	松江市内中原町52 TEL (0852) 22-5725
印刷	島根印刷株式会社

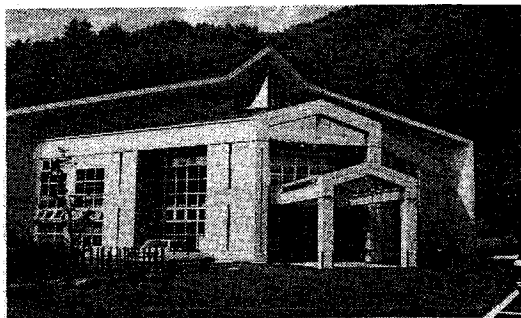
設置場所 吉田村農村環境改善センター
 担当者 湯村 茂
 貸出期間 14日間
 蔵書冊数 3,480冊
 図書購入費 45万円

昭和60年10月1日、新築になった吉田村農村環境改善センター内に図書センターがオープンしました。室内は白い書架にワインカラーのじゅうたんが敷きつめてあり、明るく落ち着いた感です。窓も絵ガラス張りで非常に明るく、窓越しに庭園が眺められ、近代的な施設と日本的な雰囲気が出揃ったおしゃれな図書室です。

開館に伴い成人用図書1,545冊と児童書1,935冊を購入し、県立図書館から5,000冊の図書を借り、合計8,480冊の図書を用意しました。

オープンしてから3ヶ月間に成人用図書376冊、児童書1,134冊の貸出しがありました。利用の多いのはやはり子供達です。特に図書室がオープンしてからは高学年と中学生の利用が増えました。

このセンターの特色として、この図書室をいつでも利用してもらうため年末年始を除く日曜・祭日も開館することにし、土曜の午後と日曜・祭日には第三セクター「吉田ふるさと村」が管



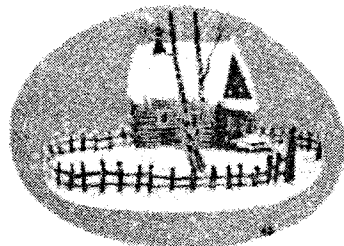
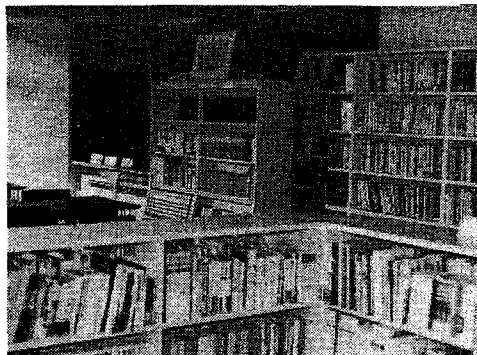
新図書センターの横顔・吉田村

理することにしました。又、多くの人の利用を図るため、地区婦人会、保育所、村内6つの理容美容院、田井コミュニティセンターなど、身近な所への配本活動も行っています。

これからは中学生向け図書・成人向け図書の充実を図り、広報活動などにより読書人口の増加を図っていきたくと思っています。又、新着図書の紹介コーナーや、いろいろな企画のコーナーを設けたり、工夫を凝らしたりしながら、楽しく気軽に誰でも利用出来る図書室にしていこうと考えています。

現在、子供読書活動のモデル町村に指定されているので、子供読書の基盤となる親子読書活動を盛んにするためお母さん方へも呼びかけて絵本の読み聞かせを定着化させ、ボランティアの養成にも取り組んでいきたいと思っています。

図書室来館者との対話を大切にしながら、読書のひろがり求めてがんばりたいと思います。

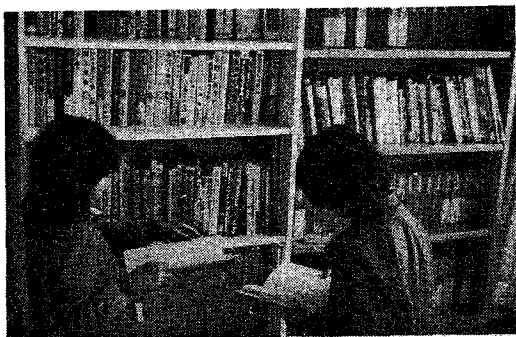


私達の文庫活動 ⑤

安来市 川崎 律世

安来市には、市立図書館と安来青年会議所運営の児童図書館がありますが、いずれも市の西部にある為、東部に住んでいる子供達は、小学校に入学すると学校から帰るのが遅い為、めったに図書館を利用する事が出来ません。

幼児期から図書館に慣れ親しんできた子供達が本にふれる機会が減った事を残念に思った私は、自分が図書館に通い貸出しを受けていたのですが、読んでしまうのは速く、交換にはなかなか思うようには行けません。個人で所有するのも限度がありますし、なんとか一度にもつとたくさんの本を、と考えて県立図書館の団体貸出をお願いしました。初めて借りて帰った本は、30冊程でした。ダンボールの箱に詰めて帰る時は、家族4人分合わせて借りられる冊数の3倍なのでとてもうれしかったです。ところが家に帰り、いざ並べてみますとたった3段ボックスの1段程しかありませんでした。それからは、出来る限り100冊に近い冊数を借りて帰る事にしています。それに我家にある本を合わせて貸出しをしています。



文庫利用者は、大人と子供が半々位で、常時利用者は20~30名程です。学校の休みの時は、子供の利用者が増え嬉しく思います。子供は小学生がほとんどを占め、中学生が少しです。それにその子供たちのお母さん達です。お母さん達に人気のある本は、小説よりも子育てをしていてつきあたる悩みもあるので、そういう関係の本とか料理の本等です。「図書館迄は行けないけど、ここなら借りに来られる。読んでみたいと思う本がだいたいあって借りやすい」

とって3ヶ月毎に交換して帰るのを楽しみに待っていて下さるお母さんもあります。「借りてみて良かった本を買ったよ」と話して下さるお母さんもあります。なかなか我家迄来られないお母さんには、私が外出した時に届けたりします。子供達は、「この本がおもしろかったよ」と情報交換しながら次の本を捜します。そして知らぬ間にシーンとなって一生懸命本を読んでいます。ここで子供達をみている限りでは、読書する子は特異な存在とか、現代っ子はテレビとマンガとテレビゲームだけで活字は苦手と言われているのは、何かの間違ひではないのかなあと思います。読書している子供達の表情は自然で、物語の中に入って自分の世界を創っているようです。好きな子供達も確実に育っている実感出来ます。子供達が本の交換に来る頻度に比べ文庫の図書数が少なくて変わりばえのしない3ヶ月が続く事があります。もっと図書は充実させたいのですがなかなか思うようにはいきません。本を借りに来られるお母さん達や、子供達によって友達の輪が広がっていく事で図書不足をカバーしています。

図書館や移動図書館が身近にある所はしあわせですが安来市の場合は、まだそこに至っていませんので出来る限り文庫活動を続けて行きたいと考えております。県立図書館の館外奉仕用図書には、ポピュラーな楽しい本がたくさんあって、私は宝探しにでも行くような期待感と楽しみを味わっています。

私は小学校、高校時代、とても読書施設に恵まれて過ごしました。高校時代は、図書部に属し他県に研修旅行に行った思い出もあり、それが文庫活動の励みとなっております。文庫を利用されているお母さんで家庭文庫を開きたいと考えていらっしゃる方があります。その人も合わせ、これから先もつと家庭文庫が増え、図書やいろいろな情報交換も出来るようになれば良いと思っております。

所在地 安来市西十神町12-13

休館日 なし

開館時間 9:00~18:00

心を育てる読書 その1

こぐま社社長 佐藤英和



〈語りかけることばで聞く力が育つ〉

ことばの最初は、聞くことから始まります。聞くことができるのは、話す人がいるからです。

私たちは、赤ちゃんが生まれてすぐ何にも話すことができないときから、その赤ちゃんにことばで語りかけることを実にたくさんしたのです。眠そうにしていれば子守歌を歌ってやり、寝ていてもその子を見ながら話しかけてやり、目を覚ますと「よくねんねしたね」と声かけをしてきました。

しかし、テレビが出現してからは、声かけが少なくなりました。そして、何にも分らない子供にテレビを見せているという事実があるのです。テレビから流れてくることばというものは、決してその子供に対して語りかけられていることばではないのです。赤ちゃんに語りかけるテレビ番組はないのです。人格をもたない、命をもたない機械から流れる声やことばが、その子供に浴びせかけられています。それは、単なる刺激です。そういうことばの刺激にさらされながら子供が大きくなっているのです。

聞く力が育つのは、その子に話をしてやるときにその子が聞くときに育つのです。聞こえるということ、聞くこととは違うのです。赤ちゃんは聞こえるのです。赤ちゃんは見えるのです。しかし、その子がテレビを聞いているのではなく、見ているのではないのです。私たちは、子供たちがことばを獲得する一番最初の段階で、人格をもたないことばが氾濫していることを大事な問題として考えたいのです。それは本を読むことに深いかわりがあるからです。

〈絵本の中で見出す楽しみが多いほど本好きになる〉

子供は、聞くことができるようになると、お話をすることができるようになります。そのとき私たちは、子供たちが話そうとすることをよく聞こうじゃないですか。私たちは、赤ちゃんのときに子供が何を要求しているのかを泣き声ひとつで、あるいは「アー、ワー」という喃語ひとつで聞きとろうとしたものです。子供の話に耳を傾けるととき話す力が育つのです。

子供たちは、聞くことができ、話すことができ、絵が読めるようになるのです。絵は、ことばです。

私たちは、絵をことばとして見ないで芸術として

見ているのです。しかし幼児は、これをことばとして見ているのです。何がそこに描かれているのか、自分に語ってくれるのは何なのかという関心からしか絵本と接しないのです。そこが違うのです。

子供たちは、絵が読めるようになると自分で絵を描き出します。芸術作品を描いているのではなく、ことばとして絵を描いているのです。それを私たちが、読みとり、聞きとるときに子供たちのことばの力が発達してくるのです。この時期に絵をとおしてのことばの発達が急激に伸びてきます。このとき、たくさんの絵本を読んでやらねばなりません。

子供たちは、やがて字が読めるようになります。字が読めるようになって、その本の中味を読みとるほどことばの力が発達しているわけではないのです。続けて読んでやらなければならないのです。くり返しくり返し楽しい本を読んでやってほしいのです。子供たちが「お田さんあの話をして……」といって、かつて楽しんだ思い出のある話をねだったとき話をしてやればよいのです。そのときに子供たちは「ああ、お話を聞くてことは楽しいなあ。本を読むことは楽しいなあ」ということが分ってくるのです。そして、そういうことを体の中で覚えた子供たちは、読書というものが楽しいことだと分るのです。そのような経過をたどって字が読めるようになると本を読むようになってきます。私たちが「読みなさい」と言わなくても、楽しい世界がそこにあることを知ったら、どうして読まずにおられるでしょうか。ドロシーホワイトは、「その子供が絵本の中で見つけ出す楽しみの量によって、生涯その子供が本好きになるかどうか決まる」といっています。本が楽しいものであるかどうかが大変なかぎです。

あとがき

昨秋、11月12日から14日にかけて、美都町・旭町・温泉津町・西の島町の4会場において子供読書講演会を開催しました。講演の要旨を掲載しました。次回（第72号）に後半を掲載します。

わが町の巡回文庫は、町内全体の読書普及を目的とし、遠隔地の人に、手軽に図書を利用してもらうと、53年から4カ所を拠点として始めました。その内2カ所は公民館に比較的近く、直接利用する人が多くなり、一時期は2カ所の巡回としました。ところが、コミュニティセンター等、町の社会教育施設の充実に伴い、かねてから巡回文庫の強い要望があった地区1カ所への巡回を、58年6月から開始し、町内3カ所としました。毎月2回、400冊余りの図書を専用箱につめ、ライトバンで回ります。巡回に際しては、前日から有線放送を通じて知的好奇心をそそり、読書欲を刺激して利用を呼びかけています。その甲斐あってか、1回の巡回で200冊前後の利用がありうれしい悲鳴をあげています。

しかし、巡回場所での図書の積みおろしは、体力と時間を要し、専用車があればなあ、と思います。でも今は、利用者の方が手伝って下さり、申し訳なく思いながらも、うれしさを隠せません。随分

わが町の巡回文庫 ⑦
多伎町教育委員会

前からの知り合いだったような気がするのは私だけでしょうか。この小さなふれあいを通し、利用者の方々の好みもほほわり、本を選ぶ際の参考にしています。

利用者は、30歳～40歳位の主婦が中心ですが、入園前の子供達がお母さんと一緒に絵本を選ぶ姿も目立ち、親子読書の広がりや定着を感じさせてくれます。「買うと高くて、こんなに沢山読めないけど巡回文庫のおかげで助かっています」とおっしゃるお母さん。「読んでもすぐ忘れるんだけど、本が好きでねえ」と笑うおばあさん。自分が読んだ本の情報交換の場としても、大いに役立っています。

こうした声に支えられ、巡回文庫は安定した活動になりました。これからは、ボランティアの確保と、配本活動にも力を入れていきたいと思えます。また、59年からは、読書の

啓蒙にと、「としよつうしん」を発行し、小さな町の大きな巡回文庫を目指し、頑張っています。

新成人におすすめする本

読書推進運動協議会では毎年、成人の日になんで本を推せんしています。皆さんもぜひ読んでみませんか！

書名	著者	出版社	定価	書名	著者	出版社	定価
一休	水上勉	中央公論社	1,500	薄化粧	西村望	立風書房	1,200
悲しすぎて笑う	森崎和江	文藝春秋	1,300	鳴りひびく鐘の時代に	マリア・ペ	富山房	1,700
親子で乾杯	アン・萌夢	誠文堂新光社	1,100	米山京子のゆめいろ人形	米山京子	雄鶏社	1,200
朱夏上・下	宮尾登美子	集英社	各980	科学の知恵心の智慧	広中平祐	佼成出版社	1,200
灰谷健次郎の保育園日記	灰谷健次郎	小学館	980	樹海に生きて	高橋延清	朝日新聞社	1,200
もういちど春	岸宏子	中日新聞社	1,400	核の冬	カール・セーガン	光文社	1,300
ほんとうの私を求めて	遠藤周作	海竜社	1,100	どう映っているか日本の姿	NHK取材班	日本放送出版協会	1,300
諸君！この人生大変なんだ	山口瞳	講談社	1,100	表と裏	土居健郎	弘文堂	1,000
お母さんお元気ですか	はらみちお	主婦の友社	1,200	河童が覗いたインド	妹尾河童	新潮社	1,200
豊臣秀長上・下	堺屋太一	PHP研究所	各1,200	情報ネットワーク社会	今井賢一	岩波書店	430
さまざな愛のかたち	田宮虎彦	暮しの手帖社	1,600	広島第二県女二年西組	関千枝子	筑摩書房	1,200
いま結婚が危い	斉藤茂太	読売新聞社	1,100	うらおもて人生録	色川武大	毎日新聞社	980